

〔論 文〕

# ケベックの「移動文学」の浸透と波及

——『フランス移動文学作家事典1981-2011』の刊行をめぐって——

真 田 桂 子

## はじめに

グローバル化がすすむ今日、様々な分野での領域再編の動きが顕著であるが、文学においてもその流れは押しとどめようのないものとなっている。いわゆるフランス語圏文学においても、これまでのフランスを中心とする「普遍的」な価値観による規範は徐々に有効性を失い、中心と周縁とが交錯する領域再編ともいえる新しい様相を呈している。その変容を促した大きな要因としては、グローバル化の波の中で顕著になってきた移民作家の存在があるだろう。

カナダのフランス語圏であるケベックでは、1960年代頃からナショナリズムが沸騰し、文学においてもフランス系のアイデンティティの確立を模索する動きや「国民文学」を追求する動きが見られたが、1980年代に入ると多民族化が一気に進み、様々な出自の移民たちによるフランス語表現文学が花開く。ケベックの移民作家たちによる文学は、「移動文学」*l'écriture migrante*と命名され、独特のジャンルを形成するに至った。

フランスやベルギーなど、他のフランス語圏の地域においても移民の文学は存在し、その影響は無視できないものになっている。しかし注目すべきこととして、ケベックの「移動文学」は、ケベック文学の中で大きな影響力を持ち、さらにケベックのみならず、欧州など他の地域にも波及して、グローバル化を象徴する一つのジャンルとなりつつあることである。それを象徴する出来事として、2012年にフランスにおいて初めて移民作家に注目し、ケベックで発祥した「移動文学」の概念に則った、いわゆる『フランス移動文学作家事典』が刊行された。

この論考では、ケベックの「移動文学」の発祥と特徴を明らかにしたのち、この事典について詳しく検証しながら、フランスを中心に欧州にも波及している「移動文学」の現状と可能性について考察する。またそれを踏まえ、変容するフランス語圏の文学全体についても展望する。

## I ケベック文学と「移動文学」

### 1. ケベック文学の変遷

ケベックの文学は、歴史的経緯から「フランス系カナダ文学」として、カトリック教会に支配され生き残りをめざす閉鎖的なナショナリズムのなかで形作られてきた。当初、その大部分は旧宗主国であるフランスの文学の模倣や追従に過ぎなかった。十九世紀半ばには、「フランス系カナダ文学」は、二重の周縁性と疎外感を生きながら、愛国的で土地を信奉する「郷土礼賛文学」を創り上げる。その他、幾多の歩みを経ながら、「フランス系カナダ文学」とは、絶対的なマイノリティとしてのフランス系の脆弱性や危うさを背景にした「生き残り」への模索を表わす文学であった。

このような「フランス系カナダ文学」に転機が訪れるのは、二十世紀後半の1960年代、ケベック社会に近代化をもたらすことになった「静かな革命」と呼ばれる行政改革と一連の革新的な動きにあった。それまで、ケベック州内では数の上ではマジョリティでありながら、マイノリティである英語系の住民に政治的に支配されてきたフランス系の人々は徐々に自信をつけ始め、フランス系としてのアイデンティティを強く主張し始める。こうしてケベックは、閉鎖的な「生き残り」を目指すナショナリズムから、フランス系文化の積極的な開花を目指すナショナリズムへと変貌を遂げることになる。そして「フランス系カナダ文学」は、被植民地的な名称を脱ぎ捨て「ケベック文学」へと脱皮する。七〇年代、カナダからの分離独立も辞さない強硬な政治的ナショナリズムとも連動し、この時代の「ケベック文学」は、まさに言語、ナシオンとの一体化を具現する活力をもった媒体であった。

## 2. ケベックにおける「移動文学」の発祥<sup>1)</sup>

1980年代に入り、ケベック文学に大きな転機が訪れる。1980年の分離独立の可否を問う州民投票の否決を機に、対オタワを意識する外向きであったケベックが、内向きとなり社会の多元化を強く意識するようになる。すでに1960年代から、移民法の改正により多様な出自の移民が入り込みケベック社会の多民族化は進んでいた。

1980年代、仏系、英系、そして英仏以外の言語を母語とするアロフォンと呼ばれるマイノリティが共存するモンリオールの言語的三極構造を背景に、知識人らによってトランスカルチュラリズムが提唱された。トランスカルチュラリズムは複数の文化を横断する途上でのラディカルな文化変容の可能性を問いかけ、1983年にF. カッチャラを中心に創刊された雑誌『ヴィス・ヴェルサ』*Vice Versa* は、三言語を使用し、モンリオールで浸透しつつあるトランスカルチュラルな状況を活性化し、流通させることを目的としていた。

トランスカルチュラリズムを流通させた『ヴィス・ヴェルサ』の誌上では、ケベック社会の多民族化と多元化を反映した様々なテーマが取り上げられ、批評家や作家たちによって活発な意見表明や論争が繰り広げられた。ケベック社会の多民族化と国民文学論をめぐる「ラリュ論争」や自己翻訳文学の正当性を問う「ヒューストン論争」など、ケベック社会をゆるがしてきた様々な論争においても、『ヴィス・ヴェルサ』は重要な意見表明の場となった。この雑誌はまた、八〇年代に台頭してきたネオ・ケベコワと呼ばれる移民作家が表現活動を行う主要な舞台となった。

ケベックにおいて、八〇年代に仏語表現によって活発に創作活動を行うようになった移民作家の文学は、移民文学ならぬ「移動文学 (*l'écriture migrante*)」と呼ばれて一つの潮流をなし、ポストモダニズムが爛熟したケベック社会の文化的雑種性の象徴として注目を浴びることになった。ダニエル・シャルティエは、1800年から1999年の間にケベックで活動した移民作家を網羅した辞書を編纂し、その序文において次のように述べている。

二十世紀末のケベック文学を特徴づける重要な出来事の一つは、1980年代に無視できない動向となった「移動文学 (*l'écriture migrante*)」の台頭である。(…) 移民の文学状況を他国と比較して、とりわけケベックにおいて魅力的であると思われるのは、この一連の移民作家たちによって作られた文学は急速に発展して、一つのジャンルとして批評家たちの注目を浴びるところとなり、ケベック文学そのものに大きな影響を及ぼす一大潮流となったことである。他国においては、例えばフランスでは、移民作家の文学はあくまでフランス文学全体のなかに吸収されてしまっているし、ベルギーでは周縁的な位置に追いやられており、どちらかと言えば移民であるという立場は隠蔽されるか無視される傾向にあると言えよう<sup>2)</sup>。

しかしケベックの文学史をさかのぼれば明らかなように、移民作家はつねに存在しており決して近年になって現れた現象ではなかった。ケベック文学において、例えば『マリア・シャブドレーヌ』を記したフランス人のルイ・エモンに代表されるように、外国出身の作家たちは大きな足跡を残してきた。このように移民作家は以前より存在していたが、1970年代までは移民作家の多くは例外的な場合を除き、自らのアイデンティティの拠り所を求め唯一の起源の創出に腐心していたケベック文学のナショナリスティックな流れに対して、あくまで周縁的な位置におかれていたと言えよう。

そして八〇年代半ば以降のケベックにおいて、移民作家の作品は「移動文学」と呼ばれて一つの潮流をなし、ケベック文学の中央に躍り出ることとなった。移民作家の活躍はケベック文壇に少なからぬ波紋と反響を呼び起こし、ケベック文学とは何か、グローバル化が進む今日、国民文学は果たして存在するのか、という根本的な問いかけを投げかけることになった。このように、「移動文学」はケベック文学を揺るがしその様相を大きく変えることとなる。

### 3. 「移動文学」とは：テーマと文体

「移動文学」という語は、1986年に『ヴィス・ヴェルサ』の誌上において、批評家のオリオルによって初めて用いられた。彼はハイチ系作家のジャン・ジョナサン<sup>3)</sup>の著作を「移動文学の流浪性」<sup>3)</sup>にみちていると評し、ケベック文学の行く末に大きな影響を与えるだろうと予言した。

「移動文学」の意味はオリオルが提唱した時点ではまだ曖昧であり、「移民文学」とほぼ同義で用いられ、主にネオ・ケベコワといわれる八〇年代以降に注目されるようになった移民作家の創作活動を言い表していた。しかし、この語は広まっていくにしたがって、「移民文学」とは明らかに一線を画する新しいインパクトをもった語として定着していく。

ケベックにおいて八〇年代半ばから広がり始めた「移動文学」とは、文化的な出自や民族性をテーマとする「民族文学」でもなく、移民や移住にまつわる条件や移民体験のトラウマをかたる「移民文学」でもなく、単に祖国から切り離された哀感やノスタルジーや流浪をテーマにした「ディアスポラ文学」でもないのである。例えば、ピエール・ヌヴェーは「移動文学」の特徴について次のように言い表している。

「移民」文学というと、多くのテキストがそうであろうが、何よりも移民という体験に、すなわち祖国を離れた苦悩や新しい土地での生活にともなう困難にその焦点がおかれるのに対して、「移動」文学は、例えば漂泊や混淆や交錯など、移動と流浪の体験が引き起こすさまざまな経験的かつ心理的な動きそのものに固執するのである。「移民」という語は社会的文化的な意味合いを持つ語として規定されるが、「移動」は何よりも文学の根底にある美学的な実践そのものを指し示している<sup>4)</sup>。

すなわち「移動文学」とは、社会的文化的な射程とともに美学的な側面が強く押し出された文学なのである。一方、フランスからケベックに移住したユダヤ系作家のレジヌ・ロバンは、さらにラディカルな意味を見いだしながら、「移動文学」とはあらゆる既存の枠組みを解体し、その向こうに開かれた想像力の地平を構築しようとするエクリチュールであると主張する。すなわち「移動文学」は、移動とポストモダンが行きついた雑種の多元的なケベック社会を象徴し、伸展するトランスカルチュラルな状況を映し出すテキストにはかならない。文化的変容そのものを問いかけるトランスカルチュラリズムは曖昧で明確に捉えることは難しい。それは理論よりも創作やテキストの読み解きという実践のなかでこそ意味をもち、その実体が明らかになってくると思われる。

「移動文学」のテーマの特徴をまとめれば、祖国から切り離され新天地へと降り立ったことからくる、

祖国への郷愁や記憶、喪、根こぎ感、流浪、彷徨、アイデンティティの変容、自我の複数性と新しい主体の誕生、自由への渴望と反逆などが浮かび上がってくる。一方、「移動文学」の文体の特徴としてしばしば指摘されるのは、自伝的な作風や複数の時と場所を指向する雑種的な文体である。中国系の仏語表現の作家であるイン・チェンのテキストは、第一作である『水の記憶』において、透明感の高いみずみずしい文体でノスタルジーを彷彿とさせながら記憶に浮かぶ祖国の姿を浮き彫りにした。レジーヌ・ロバンの『ケベコワット』では、分裂し、激化した意識とアイデンティティの不安定感は街角の情景に投影され、そこから葛藤する雑種的な自我の様相が浮き彫りにされていく。この作品には、既存の枠組みを解体しようとする「移動文学」の方法論的な試みが最も先鋭に表れていると言えるだろう<sup>5)</sup>。

#### 4. 「移動文学」の浸透とトランスミグランス

「移動文学」は九〇年代に入って広く認識され、教科書にも取り上げられるなどケベック文学のなかに制度的に組み込まれた感がある<sup>6)</sup>。しかし、「移民作家」に組み入れられる作家のほとんどは、カテゴリー化されることへの戸惑いや抵抗感をあらわにしている。

ケベックで「移動文学」が台頭した二十世紀後半、フランスの場合を考えると、移民出身の作家は存在するが決して別のカテゴリーにくくられることはなかった。どのような出自の作家の作品であろうとも、フランスではあくまでヒューマニズムと普遍性の名のもとに文学的価値が評価されフランス文学として扱われていた。このようにケベックにおける「移動文学」では、移民出身の作家たちは明示されたうえで承認され、様々な矛盾を抱えながらもケベック文学そのものの見直しを迫るほどの影響力を持ち得ている。移動文学作家の出現と無視できない影響力によって、それまでのケベック文学の担い手は開かれた感性のなかで自らを再認識する必要に迫られた。「移動文学」は、ケベック文学の枠組みのなかで周縁的な位置にとどまっているのではなく、むしろケベック文学を活性化し、外部に向かっておし広げ発展させることに貢献していた。

二十一世紀に入り、ケベックにおける状況は大きく変化している。モンリオールにトランスカルチュラリズムを流通させた雑誌である『ヴィス・ヴェルサ』は、すでに1997年に休刊となった。しかしその後、ほぼ同じコンセプトをもつ雑誌『スピラル』が刊行され、トランスカルチュラルな文化状況を活性化する目的は引き継がれている。また、ケベックにおける「移動文学」の重要な担い手であったエミール・オリヴィエは2002年にこの世を去り、イン・チェンはモンリオールを離れバンクーバーに移住した。「移動文学」自体、以前ほどインパクトをもったものとして語られることは少なくなったかもしれないが、それがもたらしたものに対する関心は依然として高く研究対象として取り上げられることは多い。何より、「移動文学」は教育を通して若い世代に影響を与え、トランスミグランス<sup>7)</sup>と呼ばれるように、ケベック文学及び社会に深く浸透したと言えるだろう。今日、九〇年代の「移動文学」作家とは異なった作家が輩出し、ケベック文学における複数化と多元化は新たな局面を迎えているといえるだろう。

## Ⅱ 「移動文学」の欧州への波及

### 1. 『フランス移動文学作家事典』の刊行とその背景

画期的なことに、2012年、フランスにおいて、ケベックで発祥した「移動文学」*l'écriture migrante*の概念に則った『フランスにおける通過と定住、移動文学作家事典（1981-2011）』（*PASSAGES ET ANCRAGES EN FRANCE, Dictionnaire des écrivains migrants de langue française 1981-2011*, 2012, Paris, Honoré Champion）<sup>8)</sup>（＊以後、本稿では『フランス移動文学作家事典』と呼ぶ。）が出版される。



Mar. 2014

ケベックの「移動文学」の浸透と波及

それまでも、ケベックの「移動文学」は欧州の研究者から注目され、何度かシンポジウムが開催されたこともあったが、この事典の刊行は欧州における「移動文学」の波及を決定づけ、「移動文学」はもはや、ケベック、すなわち「美しい辺境の地」における一つの文学潮流にとどまらず、フランス語圏全域に影響をもつ、グローバル化を象徴する一つのジャンルとして認識され始めていることが明らかになった。

この事典の成立について検証するとき、いくつもの極めて興味深い事実につきあたる。まず、この事典の編纂を企画し指揮した監修者とはウルズラ・マティアス＝モーザーとブリギット・メルツ＝バウムガルトナーで、二人はともにインスブルック大学で教鞭をとる、オーストリア人のフランス語圏文学の研究者である。さらに、この事典の刊行にあたっての経済的な支援は、監修者の勤務校であるインスブルック大学をはじめ、オーストリア政府文化交流省、チロル州政府などのフランスの外の出版補助金が大部分を占めている。またこの事典の出版を引き受けたのは、パリとジュネーブに出版拠点を置く、フランスの学術系出版社の一つである HONORÉ CHAMPION 社である。一方、監修者の呼びかけに応じて実際に事典の編纂に携わり、取り上げる項目や執筆者の選定、原稿の取りまとめと編集を行った編纂者は、フランスのマグレブ系文学研究の第一人者である Ch. ボンス、パリ第三大学教授で仏語圏文学の専門家である D. コンブ、やはりパリ大学で教鞭をとり、フランスにおけるアフリカ系文学の専門家である J. シュブリエ、さらにベルギー、スイスなどからフランスへ移住したヨーロッパ系作家の動向に詳しい P. デイルックスなど、内扉に挙げられている 7 名の主要な編纂者の大部分はフランス人研究者が中心である。そして実際に、事典の序文に掲げられている詳しい説明にあるように、総頁が 1000 頁近くにも達する大部の事典の各項目の執筆にあたった研究者は 150 名以上にのぼり、その出身はフランス、欧州のみならず、カナダやアメリカ、アフリカなど 50 カ国以上の世界各地にまたがるという。すなわち特筆すべきこととして、この事典は、フランスへ移民あるいは移住した作家を扱う「フランス文学」に関する事典でありながら、オーストリアというフランス外の研究者によって主導的に企画、監修され、フランスのみならず世界各地の専門家によって編纂された、まさにグローバルな人材による視点から編纂、執筆されたものであるという事実である。

こうした成立の経緯について、この事典の序文での監修者による詳細な説明と編纂者の一人である ボンス教授とのインタビューをもとに総合的に検証していくと、その背景には、移民問題を中心とするフランス社会に固有の問題とともに、行き詰まり岐路に立つフランス文学が置かれた今日の状況が浮かび上がってくる。

### (1) 移民問題とフランス文学

まずフランスにおいて、フランスへ移民あるいは移住した作家のみに注目し、そうした作家を網羅的に扱った書物とはおそらくこの事典が初めてであろう。そうした意味で、この事典の出版は、ケベック発祥の「移動文学」概念に則って編纂されたというだけでなく、それ以前に極めて画期的なことである。すでに述べたように、ケベックでは 1980 年代から、移民作家による文学が注目され、「移動文学」という一つのカテゴリーとして認識され、ケベック文学そのものに大きな影響力を及ぼしていた。しかしフランスでは、ごく近年まで、フランス文学の範疇で移民の文学を語ること自体が極めて難しかったと言えよう。そもそもフランスでは、「一にして不可分の共和国」精神に則り、フランス内での多文化の共存について、差異を強調したり容認したりして語ることにはある種のタブーとされていた感がある。このような違いは、カナダやケベックとフランスにおける移民の立場や移民政策の違いに起因していると考えられる。フランスにおける移民とは、かつてはフランス国内の労働力不足を補うための調整弁に過ぎない労働移民であり、大部分がベルギーやイタリア、東欧などフランスの近隣諸国からの移民であ

った。カナダやオーストラリアのような永住型の移民国家とは異なり、移民の貢献を認め、移民の文化的多様性を尊重するといういわゆる多文化主義的な理念や政策は、フランスでは殆ど根付かなかった。一方、フランス文学において、J. クリスティヴァやT. トドロフが喚起したように、外国人や他者との共生は重要なテーマとしてしばしば思想家たちによって取り上げられてきたが、制度としてのフランス文学においては、外国からフランスに移住したフランス語表現の作家たちは、決して移民作家としてのテーマや文体の独自性によって認められるわけではなく、何世紀も続いてきたフランス文学の価値や伝統に照らした普遍性において評価され、フランス文学のなかに吸収されてしまう傾向にあったと言えるだろう。

さらに1970年代以降、アルジェリア、チュニジア、モロッコのマグレブ三国に代表される、独立したフランスの旧植民地からの大量の移民がフランスに流入するようになり、そのアラブ系移民との共存と統合は、異文化間の隔たりの大きさからしばしば文化摩擦を引き起こし、今日、フランスの移民問題と言われるように、フランス社会に大きな影を落とすことになる。文学においては、フランス語を十分に使いこなせないマグレブ出身の第一世代に代わって、移民したアラブ系の親のもとで、フランスで生まれた Beur(e) と呼ばれるアラブ系の第二世代の子供たちのなかから、親の出自であるアラブ系文化と受け入れ社会であるフランス文化との狭間で揺れ動き、アイデンティティの危機感や新しいアイデンティティの生成などをテーマに、アラブの言語が入り混じった独特の文体と感性をアピールしながら表現する作家が現れ、アラブ系二世文学として独特の存在感を放つようになる。しかしこのアラブ系二世文学も、フランス文学の伝統的普遍的価値観に照らして、しばしば成熟した文学とは見なされず、制度としてのフランス文学のなかで十分に評価されてはこなかった<sup>9)</sup>。

このように、フランスにおいて移民に関する文学は、フランスにおける移民問題という極めてデリケートで難解な社会的状況を背景に、長らくフランス文学のなかで周縁的な位置に置かれるか、平等主義、普遍主義といった欺瞞に満ちた価値観のもとで隠蔽される傾向が強かった。そして、この『フランスの移動文学作家事典1981-2011』は、そのような閉塞的な状況を打ち破る画期的な出版であったと言える。しかしながら、すでに指摘したように、この事典がフランスではない外国の研究者によって企画、編纂された事実は、フランス国内では、まだまだ移民の文学への抵抗感が強く、その重要性は認識されつつあるものの、過渡的な状況にあることを表していると言えるかもしれない。

## (2) 岐路に立つフランス文学と移民作家の台頭

もう一つ、この事典の出版の背景として考えられる重要な要因は、現代フランス文学自体の行き詰まりと、近年、特に顕著になったフランスの外で生まれた作家の目覚ましい活躍である。

フランス文学は、長い伝統に培われ規範意識が高く、例えば二十世紀のポール・ヴァレリーの詩やブルーストの小説に代表されるように、研ぎ澄まされた感性から紡ぎだされた極めて洗練された文学を生み出してきた。一方、1970年代頃から著しく観念的な傾向が強まり、例えば思想においてロラン・バルトやジャック・デリダに代表されるような構造主義や脱・構造主義が興隆した。それに呼応するように、小説ではヌーヴォー・ロマンに見られるように、それまでの小説の構造を覆すかのような極めて抽象的、観念的で実験的な小説が主流を占めるようになる。しかしそうした傾向によって、フランス文学は難解なものとなり、袋小路に陥って多くの読者を失うことになった。こうしたフランス文学の衰退的傾向については、フランス内部の専門家もしばしば指摘するところである。例えば、

ヌーヴォー・ロマンの文体論的試みや構造主義理論の教条主義はフランス文学から活力を削ぎ、折しもグローバル化の流れの中で英語が圧倒的な優位に立つなかで、とりわけ外国人の読者離れを引

き起こした<sup>10)</sup>。

こうした近年の閉塞感にみちたフランス文学は、まさに「瀕死の巨人」であり、その衰退は必然的なことでもあった。自ら袋小路に入り込んでしまったフランス文学は自己陶醉的な傾向から脱却し、現実には回帰して小説の再生を目指す必要に迫られた<sup>11)</sup>。そしてフランス文学が外に向かって開かれ、小説の再生を実現するためには、ある意味での「周縁」からの「蛮族や異国人」の侵入が必要とされたのであり、それこそが、フランスの外から来た作家たちが注目され始めた理由の一つであろう。実際、近年のフランス文学における、フランスの外で生まれた作家たちの台頭と活躍には目を見張るものがある。2006年には、フランス文壇の最も権威ある賞であるゴンクール賞、フェミナ賞、ルノード賞の三賞のすべてが、リッテリ、ヒューストン、マバンクーらのフランスの外で生まれてフランスで創作活動を行っている、いわゆる移動文学作家に授与された。事典の序文でも述べられているように、こうした事実はフランス文学が大きく変容しつつあることの紛れもない証左であり、このような傾向のもとでこの事典が企図されるに至ったと考えられる。

## 2. フランスにおける「移動文学」の受容と特徴

複雑な移民問題を背景としたフランスで、ケベックで発祥した「移動文学」の概念はどのように受容され、適用されているのであろうか。その一例を『フランス移動文学作家事典』でのこの概念の適用指針のなかに見ることが出来るであろう。従ってここでは、主に事典の序文の解説にそいながら、その適用の方針について分析し、次に事典の成り立ちと構成、特徴について考察したい。

### (1) 「移動文学」と「ポストコロニアル文学」

すでに触れたように、フランスでの移民をめぐる状況は、ケベックにおける状況とは大きく異なり、ある意味でケベックにおける移民の状況より多様で複雑な問題を孕んでいる。すなわちケベックにおいては、フランス語使用を一つの統合の核とする多文化的社会への、世界の各地からの移民が前提となっていたが、フランスへの移民を考える場合、まず第一に、フランスの植民地主義の遺恨ともいえるマダガスカル、フランスを中心とする旧植民地からの大量のアラブ系移民の存在が圧倒的な位置を占めている。さらに、やはり植民地主義から生み出された DOM-TOM、すなわちフランスの海外県や海外領土出身者の存在も無視できないものとなっている。それに加えてフランスは、欧州の大国として、歴史的にベルギー、イタリア、スペインなど隣接する国々からの労働移民とともに、東欧、中欧やロシアなどからの政治的、宗教的迫害を逃れた多数の亡命者も受け入れてきた。すなわち、フランスには極めて多様な背景をもった移民や外国人が入り込んでおり、今日、それらの移民や移住者のなかから独自のテーマや美学をもった作品が多数生み出されているのである。

こうした今日のフランスでの多様で豊饒な移住者の文学を括る指標として、ケベックで発祥した「移動文学」が適用されたことは改めて注目に値する。監修者は序文において、この事典を企画、編纂するにあたって、いわゆる「移民文学」ではなく、ケベックで発祥した「移動文学」の概念を適用することの重要性と意義について詳しく言及している。

1980年代から90年代初めにかけて、ケベックの、アラール、ブルエ＝オリオル、ヌヴェー、フルニエなどの作家、批評家らによって投げかけられ深められた議論にそって、我々はこの事典で「移住」や「移動」という概念に注目し、「移動文学」に立脚することにした。「移民」や「移民文学」が社会的、地理的な概念を強調するのに対して、「移住」や「移動」は、主体の変容に焦点をあてながら、いわ



ゆる動的な概念そのものを伝達することになる。ヌヴェーが指摘するように「(…)『移動』は何よりも追放された経験が引き起こす流浪やいくつもの交錯など、動的経験を強調する。『移民』は社会・文化的な意味を表す語であるが、『移動』は何よりも美学的な実践を指し示すことになる」。この概念をめぐる議論において、ケベックの作家や批評家である R. ロバンや S. シモン、S. アレル、P. レローらが加わって、帰属の重複、複数性、雑種性、異種混淆、脱中心化と彷徨などの意味合いを「移動文学」のなかに見出し関連づけて論じている、ここで強調しておかなければならないのは、それらはいずれも基本的に肯定的な意味で捉えられ、『移動文学』は受け入れ先のマジョリティの文学に大きな貢献をもたらしたと見なされている点である。一方、その年代には、欧州の批評家たちはまだ「移民文学」の概念しか念頭にはなかった。およそ十年の隔たりを経て、「移動文学」という新しい語彙がフランスにもたらされたのは、「フランスにおける移動文学の位置」という論文においてであり、Ch. ショーレ・アクールや L. ビヴォーノの功績である<sup>12)</sup>。

このように、ケベックで発祥した「移動文学」概念の意義と議論の経緯が詳しく紹介されており、約十年の隔たりを経て、ようやくフランスでもこの概念が紹介されたことが指摘されている。さらにケベックの「移動文学」をめぐる議論において、それが基本的に肯定的な意味で捉えられ、ケベック文学に大きな貢献をもたらしたとみなされていると強調している点は注目に値する。

一方、引き続き序文において、フランスにおける移民の文学を考える上では、「移動文学」と「ポストコロニアル文学」をはっきりと区別する必要があるという見解が引き合いに出されていることは極めて重要であろう。すでに何度も触れたように、フランスの植民地主義の遺恨から、フランスで移民という場合、まず第一に旧植民地からの大量のアラブ系移民の存在が大きな位置を占めている。そして Beur(e) と呼ばれるアラブ系二世代の文学を含め、この旧植民地出身の作家たちの活躍は無視できないものとなっている。しかし V. ポーラらは、この旧植民地出身の作家たちの作品において、しばしば旧宗主国（すなわちフランス）への強い反発や告発が主要なテーマとなっており、旧植民地出身でフランス語を母語とする作家の作品はいわば「ポストコロニアル文学」として峻別されるべきであり、「移動文学」とは同一には扱えないと述べている。さらにこの見解において、「ポストコロニアル文学」は旧宗主国への強い異議と脱却の志向から、雑種性と他者性を帯びた文体において「第三の地平」を目指すのに対して、「移動文学」は、受け入れの地に対して基本的に肯定的であり、フランス文学の歴史的な文脈の中に組み入れられることを厭わない相互作用的な文体に特徴があると述べられている。しかし監修者が解説しているように、その指摘の重要性は認めるものの、この事典の指針としてこの見解はそのまま取り入れられているわけではない。例えば、この区別に準じれば、むしろ「ポストコロニアル文学」に分類されると思われる旧植民地であるアルジェリア出身の作家たちも、この事典においては「移動文学」作家として積極的に取り上げられている。

なお、この事典において「移動文学」作家の最も根本的な要件とは、「フランスの外で生まれた」作家だとされており、Beur(e) すなわちアラブ系二世の文学は除外されている。しかしこの点については、編纂の過程で議論があったように、異論もあり得ると考えられる。確かに、アラブ系二世の作家たちはフランスで出生しフランス国籍をもっているが、常にアイデンティティの危機感にさらされ、「移動文学」の作家たちとテーマや美学において共鳴する作品を描いている。一方、アラブ系二世の作品はしばしば、フランス語を十分に操れない一世の親の状況を代弁し、アラブ系移民の置かれた状況を告発する一面もある。しかし「ポストコロニアル文学」に分類できるかと言えば、それもやはり異論があるところであろう。彼らの文学が描く、「二つの隔たり」と称される、親の出身地にも生地フランスにも拠り所を見出せない独自の苦悩と疎外感はアラブ系二世に固有のテーマであろう。いずれにせよ、



今日、彼らはフランスの移民文学のなかで大きな存在感を放っており、どこにも分類しがたいという理由で置き去りにされているのはいささか疑問の残るところである。

このように、フランスにおける「移動文学」と「ポストコロニアル文学」との境界は必ずしも明確ではなく、大きな差異を含んでいる一方で、重なり合う部分も多いと言えよう。とりわけ「ポストコロニアル文学」とは、英語圏の文脈から発生した概念であり、フランスは歴史的に植民地主義、帝国主義を経験し共有しているとは言え、フランスの状況にそのまま適合するかは疑問である。

## (2)『フランス移動文学作家事典1981-2011』の成り立ちと特徴

一方、『フランス移動文学作家事典』の成り立ち、および構成の詳細に注目すると、次のような興味深い特徴が浮かび上がってくる。

まず、この事典で取り上げられる移動文学作家の定義であるが、序文で述べられているように、編纂者らとの間で相当時間をかけた討論が繰り広げられた結果決められたものであるという。それによれば「フランス生まれではなく（国外のフランス領に生きるフランス人の両親から生まれたものも除外される）、成年した後に、自らの意思によって、フランスへの移住あるいは移動の経験を経た作家」と定義されている。この定義にそって、50以上の異なった国や地域出身の約300人の移動文学作家が選定され収録されている。何度も指摘したように、フランスの移民作家を考える場合、ケベックにおける場合より多様な背景や事情による移民や移住が想定され、その中から「移動文学」作家を定義するにあたって、ここではフランスの外に生まれて成年し、あくまで自らの意思でフランスに移住した作家のみを選定していることは注目に値する。

次に注目されることは、この事典の正式なフランス語のタイトルを直訳すると、『フランスにおける通過と定住、移動文学作家事典（1981-2011）』となるように、「通過」と「定住」という「移動」における二つの異なったあり方が明示され、強調されていることである。この二つの言葉は、フランスの移民の代表的なあり方を象徴的に表していると言えるだろう。大部分の「移動文学」作家は、最終的にフランスに根付いた「定住」である場合が多いが、「通過」には、例えば、ケベック出身の A. エベールのように長年パリに移住して創作活動を行いながら、晩年、故郷のケベックに帰郷した作家、コンゴ出身の A. マーバンコウのように、フランスで学業を修め、長年フランスに居住してフランス語表現作家として成功した後、アメリカすなわち故郷ではない外国に渡った作家、あるいはベルギー出身の Ph. トゥーサンのように、フランスに一定期間移住して作家として成功した後、ベルギーに帰って居住しながら、隣接するフランスを行き来し創作活動を続けている作家などが含まれる。Ph. トゥーサンの場合にみられるように、欧州の隣接する地域出身の作家の場合、地理的な近さから、「通過」はしばしば「往来」の意味を含むことは興味深い。このような多様な「移動」のあり方が含意されることは、ケベックにおける場合と大きく違う点であろう。

第三の特徴として、この事典で取扱う移動文学作家の活動期間が1981年から2011年までとはっきりと限定されていることである。三十年という期間に限定した理由については次のように述べられている。すなわち先に概説したように、もともとフランスは歴史的に移民を受け入れてきた国であり、その歴史は十九世紀半ばにまで遡る。しかしフランス文学において、レグザゴン（六角形の国＝フランス）以外の出身である作家の活躍が認識され始め、顕著になっていったのは1980年代に入ってからである。とりわけ1981年は時の大統領であるミッテランが移民の受け入れを大幅に緩和し、移民の政策に大きな変化がもたらされた年であった。また今日までの約三十年はほぼ一世代をなし、この期間を詳しく検証することで、現代フランス文学に現れた「移動文学」を通時的に浮き彫りにすることを目指したとある。この限定的な期間のなかで活動が認知された作家であれば、クリスティヴァ、クンデラ、ヒューストン、

トゥーサン、マキーニらの著名な作家たちに交じって、比較的無名の作家たちも同等に一項目をさいて並列的に扱われている。一方、ベケットやイオネスコ、あるいはジュリアン・グリーンなど、フランス以外の出身で、フランス文学史にその足跡が深く刻みつけられている著名な作家たちであっても、1980年代以前に活躍した場合は除外されていると述べられている。

第四の特徴として、序文に、欧州、北米、マグレブ、サハラ砂漠以南、中東、アジアなど、事典に取り上げられている作家の出身地別に傾向や特徴が分析され、解説されているように、フランスの移動文学作家の場合、出身地の地域ごとに、移住に至る背景や傾向に違いが見られ、特徴が分かれていると言えるだろう。例えば、東欧からは、シオラン、クリスティヴァ、クンデラなど、政治的な亡命者を含め、鋭い批判精神と省察力をもった哲学者、思想家が輩出し、植民地主義の影響が刻みつけられた地であるマグレブ出身の作家からは、ディブやヤシース、ベン・ジェルーンに代表されるように、豊饒なアラブ文化が融合した独特のフランス語表現文学が生み出された。

以上のような前提のもとで、選ばれた各々の作家の項目において、プロフィールと作品文献一覧とともに、とりわけフランスへの移住や通過の体験が作品にどのような影響を与えているか、すなわちどのようなテーマと結びつき、どのような美学的戦略をもった文体に生かされているかなどが詳しく分析され言及されている。「移動文学」において特徴的な彷徨、流浪、通過、旅などのモチーフに加え、文体における断片化、矛盾、複数性や異種混濁性、また彼方とこことを重ね合わせる複眼的、交錯的テキスト、ポリフォニー（多声性）、ここと彼方の言語の語彙を入れ替えたり重ね合わせる透過的言語使用など、様々な「移動の詩学」についての詳しい分析がなされている。また、各々の移動文学作家が本流をなすフランス文学にどのように貢献し、受容されたかについても関心をもって分析されている。

ダニエル・シャルティエが一人で監修、執筆した『ケベックの移民作家事典1800-1999』では、各作家の項目はプロフィールと文献一覧に留まっていたが、『フランス移動文学作家事典』では、多数の分担執筆者が参加し、各作家の文学的特徴が多方面から浮き彫りにされている。

これまでの分析から、フランスにおける移民と文学をめぐる状況はケベックのそれより多様で複雑であり、「移動文学」はそれに合わせてより柔軟で多面的に適用されていると言えよう。このように絶えず変化をともないながら、移動と移住を思想的、美学的に捉えようとする「移動文学」は、グローバル化を象徴する普遍的な概念としてますます浸透し、波及していくであろうと推測される。

### Ⅲ 結語として―「移動文学」とフランス語圏文学の変容

ケベックのみならず、欧州、とりわけフランスにおいて「移動文学」が波及することになった要因は、何よりもグローバル化がもたらした、移民や移住による社会の変容であり、「移動文学」はそうした状況を先駆的に照らし出していると考えられる。またそれに伴い、脱中心化が進み中心と周縁の境界は曖昧となり、制度としてのフランス文学やこれまでのフランスを中心としたフランス語圏文学の枠組みは大きく揺らぎ始めている。2007年には、ル・ブリとルオーによって「フランス語による世界文学」<sup>13)</sup> 宣言が出され、多数の作家や文化人が賛同した。もはや、国家や地域、言語によって文学を分断することは不可能な時代になりつつあると言えるだろう。このように「移動文学」は、グローバル化を象徴するジャンルとしてますます浸透し波及しながら、フランス語圏文学の変容と再編を促していくと考えられる。

#### 〔付 記〕

この論文は、科学研究費補助金基盤研究C（課題番号21520357：「ケベックを中心とする仏語圏文学のトランスミ

Mar. 2014

ケベックの「移動文学」の浸透と波及

グランズー移民作家受容の比較研究」)を受けての研究成果の一部である。記して謝意を表したい。

## 注

- 1) ケベックの「移動文学」については、拙著『トランスカルチュラリズムと移動文学—多元社会ケベックと移民と文学』(2006年、彩流社)において詳しく論じている。本稿のⅠ-2章、Ⅰ-3章での考察は、一部、その内容と重複していることをお断りしておく。
- 2) Daniel Chartier, *Dictionnaire des écrivains émigrés au Québec 1800-1999*, Éditions Nota bene, 2003, p.5.

ダニエル・シャルティエはこの辞書の前書きで、ケベックで移動文学が出現するこのになった要因として次の四つを上げている。1. ポストモダニズムの影響、2. 1968年から施行されたカナダ移民法の改正—これによってケベックでも移民の出自が著しく多様化し、アジアや南米、アフリカなどの有色系移民が飛躍的に増加した。3. ケベックの移民政策の転換—急激な人口減少を補うためケベック政府は移民政策を重要視するようになった。4. ケベックにおける新しい市民権論争の高まり—レファレンダムの否決の結果、ケベック社会は内向きになり多様な構成員からなる現実に向き合い、新しい角度から市民概念を定義しなおす必要に迫られた。

ところで、l'écriture migranteを「移動文学」と訳しているが、フランス語のl'écritureは、文体や文書、書く行為そのものまでを指し示す幅広い意味を持つ語である。領域的な語としての「文学」の意味とは異なるが、日本語の「文学」にはまた、「想像力を駆使し言語によって表現する芸術作品」(広辞苑)という幅広い意味も含まれるため、そうした幅広い意味において「文学」の訳語をあてることにした。またmigranteには、「移動する」だけでなく「移住する」「(渡り鳥のように)回遊する」という意味もあるが、「移動」という訳語で代表させることにした。

ケベックにおける移動文学は、イタリアやドイツなどすでに欧州でも注目され始めている。例えば2003年6月には、ドイツMainzのJohannes Gutenberg大学において、L'écriture migranteをテーマとするシンポジウムが開催されている。

また日本においてもケベックの移動文学はすでに紹介されている。2002年4月一橋大学大学院言語社会研究科で開催された国際シンポジウム「文明の未来—混成か、純化か」で、移動文学の一翼を担うハイチ系作家のエミール・オリヴィエがゲストスピーカーとして来日し、「未来のために根下ろしと移動」と題する講演のなかで「移動文学」について述べている。(講演の内容は、シンポジウムの論考をまとめた『文化アイデンティティの行方』彩流社、2004年)に恒川邦夫訳にて収録されている。なおこの講演訳ではl'écriture migranteは「移動するエクリチュール」と訳されている。) また、2003年6月には、やはりケベックにおける移動文学を担う重要な作家の一人と見なされているユダヤ系のレジヌ・ロバンが来日し、立命館大学、一橋大学で「〈移動文学〉の現状」をテーマにした講演を行った。講演内容は、「文学界のどうしようもない単一言語性?—〈移動文学〉の現状」『立命館言語文化研究』15巻3号、2004年2月に拙訳にて紹介した。

- 3) Robert Berrouet-Oriol, <L'effet d'exil> *Vice Versa*, no.17, Dec.1986-Jan.1987, pp.20-21.

- 4) Pierre Nepveu, *L'écologie du réel*, Boréal, Montréal, 1988, pp.233-234.

- 5) 移動文学がケベック文学において大きな影響力をもつことになった背景の一つは、それまでのケベック文学と「移動文学」との間に存在する親和的な感性と想像力にあると思われる。その関係について、ヌヴェーの次の指摘は極めて重要な意味をもつ。「ケベックの想像力は、国としていまだ達成されない未達成感や欠如感、その否定的な感情がしみついた環境から、六〇年代からすでに、(心理的にも、創造的にも)幅広く流浪の感覚に刻印されていた。そしてそのことによってむしろ、開かれた、複数的なコスモポリタンな想像力の土壌が醸造されてきた。(Pierre Nepveu, *Op.cit.*, pp.200-201.)

ヌヴェーは、六〇年代からすでに、アイルランド人やイギリス人、イタリア人など様々な外国人を登場させ「多民族的」な小説を発表してきたジャック・フェロンや外へと開かれた感性で作品を作り続けたアカン、ゴッブー、デュシャルムなどの例を引き合いに出しながら、ケベック的想像力のなかにすでに刻印されていた「流浪の感覚」に注目する。ケベック詩においても、ネリガン、ガルノー、ミロンなど二十世紀のケベックを代表する詩人たちは、抑圧と疎外に苦しめられたケベックワの内的流浪を歌っていた。このように八〇年代に「移動文学」がケベック文学に登場したとき、そこで取り上げられた、孤独、疎外感、流浪、彷徨、アイデンティティの不安定感などは、すでにケベック的な想像力に十分親和し強い共感をもって受けとめられたと考えられる。エミール・オリヴィエの流浪の苦しみ、イン・チェンの自由への渴望と反逆、ミコーネが描くアイデンティティの不安定感と変容へのダイナミズムは、ケベックワにとって彼ら自身の命運とも重なり合う普遍的な価値をもっていた。

イタリア系作家のミコーネは、ケベックにおいてマジョリティとマイノリティが移民としての体験とその脆さ



- を共有しながら連帯し、それを土台に差異の承認と権利の擁護をめざそうとする新しい寛容性と連帯の可能性を示している。ケベックの想像力に刻みつけられた移民的体験とその流浪性は、こうして開かれたコスモポリタンな土壌となって「移動文学」を受容し発展させることになったのである。
- 6) *Anthologie de la littérature québécoise* (CEC) 1996, *Littérature québécoise* (HMH) 1996など多くの教科書やアンソロジーに *écriture migrante* の章がもうけられて何人かの作家が紹介されている。また, M.Leblanc, L. Collès, *La littérature migrante dans l'espace francophone — Belgique- France-Québec-Suisse*, (E.M.E, 2007) においては、「移動文学」がフランス語圏諸国において、主に教育を通してどのように受容されているかという興味深い比較検証が試みられている。
  - 7) トランスミグランスという概念は、ジル・デュブウイの次の論文において詳しく述べられている。  
Gilles Dupuis, «Les écritures transmigrantes. Les exemples d'Abla Farhoud et de Guy Parent», *Littérature Immigration et imaginaire au Québec et en Amérique du Nord*, Daniel Chartier et d'autres, L'Harmattan, 2004, pp.259-274.
  - 8) Ursula Mathis-Moser et Birgit Mertz-Baumgartner, *PASSAGES ET ANCRAGES EN FRANCE, Dictionnaire des écrivains migrants de langue française (1981-2011)*, 2012, Paris, Honoré Champion, 965p.
  - 9) フランスにおけるアラブ系二世文学の動向については拙論において詳しく論じた。真田桂子「フランスのアラブ系二世文学に見るアイデンティティの「隔たり」と克服—アズズ・ベガッグの自伝的小説に沿いながら—」『阪南論集』(人文・自然科学編) 47巻2号, 2012年3月, pp.17-25. を参照。
  - 10) Dominique Combe, *Les littératures francophones, Questions, débats, polémiques*, PUF, Paris, 2010, p.215.  
D. コンブは、この著書で、フランス語圏文学の現状と可能性について詳細かつ多角的に分析している。とりわけ第6章では、ケベックの「移動文学」を取り上げ詳しく論じている。
  - 11) Dominique Combe, *Ibid.*, p.218 それはまさに「ブルースト的空間である『病の部屋』から抜け出し、帆を上げ、鐘を鳴らし、大海に向かって窓を開け放つこと」に他ならなかったと言えよう。
  - 12) Ursula Mathis-Mose et Birgit Mertz-Baumgartner, *Op.cit.*, pp.12-13.
  - 13) Michel Le Bris, Jean Rouaud, *Pour une littérature-monde*, Paris, Gallimard, 2007.

### 主要参考文献

- Biron, Michel et d'autres, *Histoire de la littérature québécoise*, Montréal, Boréal, 2007.
- Berrouet-Oriol, Robert, «L'effet d'exil», *Vice Versa*, no.17, Dec.1986-Jan.1987.
- Bonn, Charles, dir. *Littérature Des Immigrations, 1 : Un espace littéraire émergent*, Paris, L'Harmattan, 1995.
- *Littérature Des Immigrations, 2 : Exils croisés*, Paris, L'Harmattan, 1995.
- Chartier, Daniel, *Dictionnaire des écrivains émigrés au Québec 1800-1999*, Montréal, Éditions Nota bene, 2003.
- Chartier, Daniel et d'autres, *Littérature, Immigration et imaginaire au Québec et en Amérique du Nord*, Paris, L'Harmattan, 2004.
- Combe, Dominique, *Les littératures francophones, Questions, débats, polémiques*, Paris, PUF, 2010.
- Dupuis, Gilles, «Les écritures transmigrantes. Les exemples d'Abla Farhoud et de Guy Parent», *Littérature Immigration et imaginaire au Québec et en Amérique du Nord*, Daniel Chartier et d'autres, L'Harmattan, 2004.
- Laronde, Michel, *Autour du roman beur, Immigration et Identité*, Paris, L'Harmattan, 1993.
- Laurin, Michel, *Anthologie de la littérature québécoise*, Montréal, Éditions CEC, 1996.
- Leblanc, Monique et Collès, Luc, *La littérature migrante dans l'espace francophone - Belgique- France-Québec-Suisse*, Belgique, Éditions E.M.E, 2007.
- Le Bris, Michel et Rouaud, Jean, *Pour une littérature-monde*, Paris, Gallimard, 2007.
- Mathis-Moser, Ursula et Mertz-Baumgartner, Brigit, *PASSAGES ET ANCRAGES EN FRANCE, Dictionnaire des écrivains migrants de langue française (1981-2011)*, Paris, Éditions Honoré Champion, 2012.
- Nepveu, Pierre, *L'écologie du réel*, Montréal, Boréal, 1988.
- Weinmann, Heinz et Chamberland, Roger dir., *Littérature québécoise, Des origines à nos jours, Textes et méthode*, Montréal, Éditions HMH, 1996.
- 真田桂子『トランスカルチュラルリズムと移動文学—多元社会ケベックと移民と文学』彩流社, 2006年。
- 「フランスのアラブ系二世文学に見るアイデンティティの「隔たり」と克服—アズズ・ベガッグの自伝的小説に沿いながら—」『阪南論集』(人文・自然科学編) 47巻2号, 2012年3月。



Mar. 2014

ケベックの「移動文学」の浸透と波及

林瑞枝『フランスの異邦人—移民・難民・少数者の苦悩』中公新書, 1984年。  
宮島喬『移民社会フランスの危機』岩波書店, 2006年。

(2013年11月29日掲載決定)